

4. '安芸クイーン' の着果量制限時期			
<p>[要約]</p> <p>安芸クイーンは、<u>着果量制限時期</u>を果粒軟化期後に行うと、着色示度が低く、着色促進効果も小さかったことから、着果量制限は、果粒軟化期までに行う。</p>			
研究室名	果樹研究室	連絡先	0869-55-0271 (内線230)

[背景・ねらい]

安芸クイーンでは、着色が不良になりやすく、生産が不安定となっている。これまで着果量が多いほど着色不良となりやすい結果が得られている。

そこで、最終の着果量制限時期について検討した。

[成果の内容・特徴]

本試験では図1のように満開15日後に環状剥皮を行い、粒数を40粒にした。着果量制限は、設定した5時期に1果房の粒数を20粒にすることで行った。

結果枝を環状剥皮して他部位からの影響を排除すると、均一な試験条件を設定することが可能であった。

1. 着果量制限時期が遅いほど着色の開始が遅れ、成熟期の着色示度が低かった。とくに、果粒軟化後の遅い時期に着果量制限を行っても着色示度上昇はわずかでしかなかった(図2)。
2. 果粒乾物重の増加は着果量制限時期が遅いほど緩慢であった。とくに、果粒軟化後の乾物重の増加速度に顕著な差が認められた。(図3)。
3. 成熟期の着色示度は、果粒軟化直後の果粒乾物重増加速度が遅いと低かった。

以上の結果、安芸クイーンの最終の着果量制限は、果粒軟化期までに行うのがよい。

[成果の活用面・留意点]

1. 樹勢に応じて適宜摘房するが、最終摘房は果粒軟化期までに行う。なお、本方法は着果量制限時期、着果量などの試験に有効である。

[具体的データ]

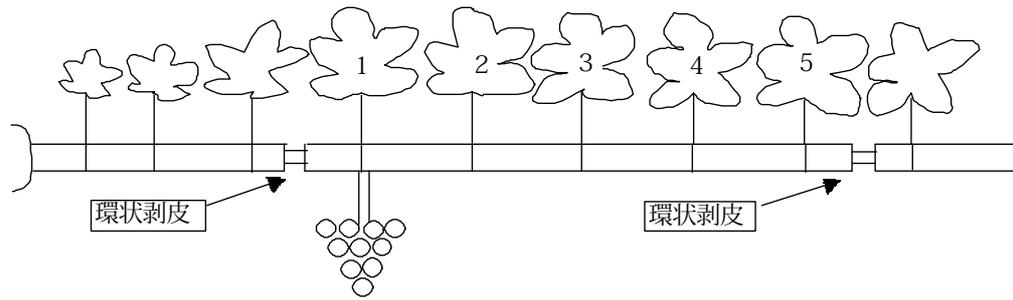


図1 処理の概要

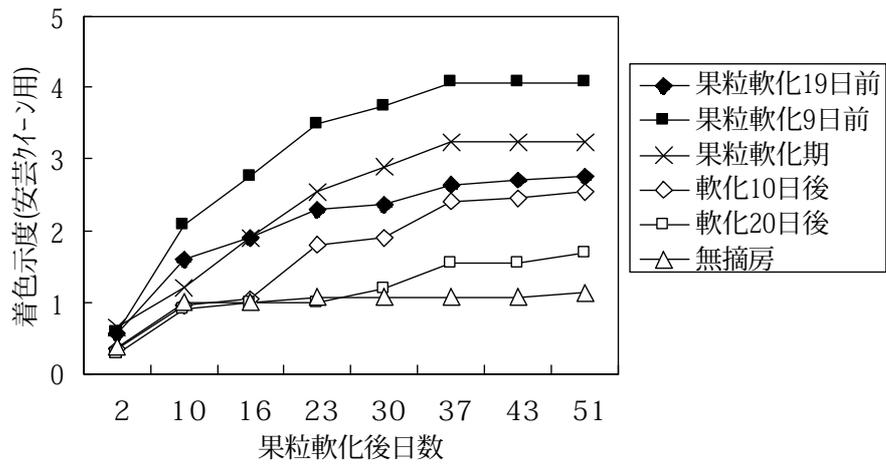


図2 安芸クイーンの着果量制限時期の違いによる着色推移

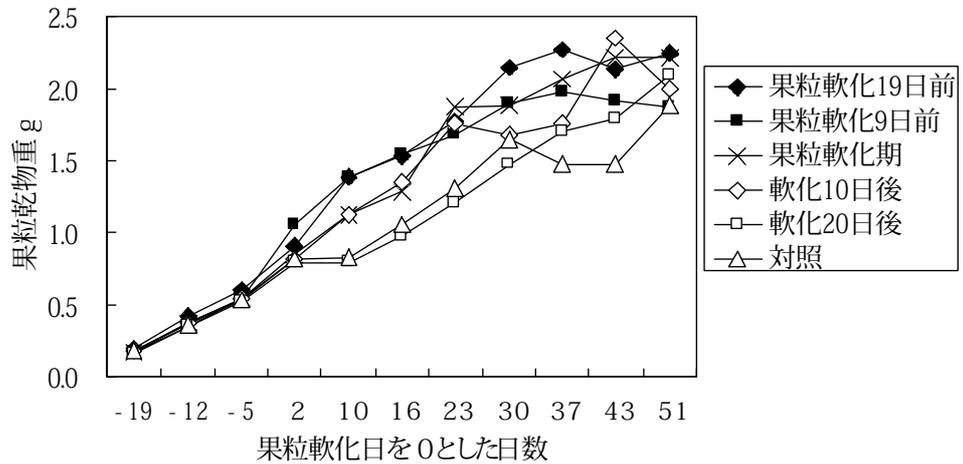


図3 安芸クイーンの着果量制限時期の違いによる果粒乾物重の推移

[その他]

試験研究課題・事業名：新品種ブドウの栽培技術の確立

予算区分：県単

研究期間：平成12年度

関連情報等：なし